

蚊帳か、帳か？

しらかわ ちひろ 白川 千尋 大阪大学 准教授

幕か、テントか？

数年前、初めてラオス北部の少数民族タイダムの村を訪れたときのことである。小さなよろず屋の店頭にならんでいる品々を物色して立ち去ろうとしたとき、店の奥のスペースに黒い幕のようなのが吊してあるのが目に入った。近づいてよくみると、それは黒い布を箱形に縫い合わせたテントのようなものだった。

直後に教えられてわかったのだが、それはテントなどではなく、タイダムの人びとの伝統的な蚊帳であった。ところが、当初わたしはそれが蚊帳であることにまったく気がつかなかった。わたしのもっていた蚊帳のイメージからかけ離れていたからである。大方の読者の方々も同じようなイメージをおもちだろうが、それまでのわたしには蚊帳といえば細かな網状のものというイメージがあった。しかし、よろず屋で生まれた初めて目にしたタイダムの蚊帳はいえ、透けていない布でできていたのだった。



よろず屋で目にしたタイダムの蚊帳。店の奥もプライベートな空間になる

蚊帳がつくる密な空間

日本でかつて盛んに使われていた蚊帳はご承知のとおり網状のものである。通気性が良く、気温の高い夏の夜でもなかで快適に過ごせる。それに比べてタイダムの蚊帳は通気性が悪く、いかにも暑そうである。しかし、メリットもある。気温の高いときはさておき、気温の低いときには通気性が悪いので、かえってなかが暖かくなる。

加えて、透けないため、外から蚊帳のなかを見通すことができない。タイダムの人びとは、夫婦とその両親などがひとつの部屋で寝起きをともにしている場合が少なくない。こうしたなか、夫婦はなかが見えない蚊帳を使うことで、自分たちだけの空間を確保することができるようになる。

後になって日本では、蚊帳は帳とばりとよばれる場合があることを思い出した。間仕切りのために垂らす布や何かを覆い隠すものを帳とばりというが、先に触れたタイダムの蚊帳のメリットを考えると、それは蚊帳ではなくむしろ帳とよぶべきものなのかもしれない。